

いま、学校での「ユニセフ活動」が果たす役割

「持続可能な社会の創り手」を育てるために

一人一人の児童/生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、**持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる。**

<学習指導要領 前文より>

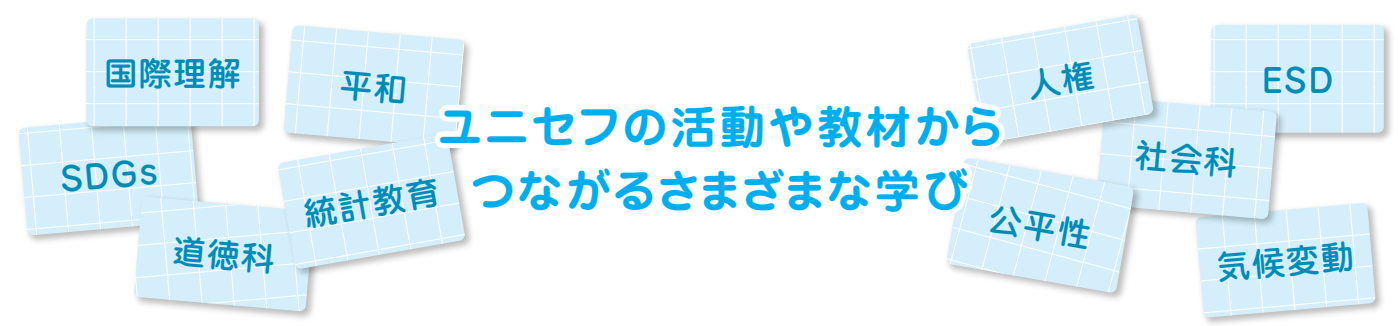
学習指導要領にも「持続可能な社会の創り手の育成」が掲げられ、SDGs(持続可能な開発目標)の学習に取り組まれている学校も多いのではないのでしょうか。

貧困、飢餓、紛争...世界には、今この瞬間も、命と健やかな成長を脅かされている子どもたちがたくさんいます。また、気候変動や環境汚染など、人類の持続可能な地球での生活を脅かす課題も深刻さを増しています。そして、そのようななか、2020年に発生した新型コロナウイルスのパンデミックは、日本の子どもたちが、世界が自分たちと繋がっていることを強く意識するきっかけにもなったのではないかと思います。

ユニセフは、世界中すべての子どもたちの命と権利を守るために活動している国連機関です。ユニセフの資料・教材や学校でのユニセフ活動は、子どもたちが世界の課題を「自分事」として捉え、自分たちにできることは何かを考え、行動する機会を提供します。そこにはかならず“主体的で対話的な深い学び”が生まれるはずです。

学校で取り組む「ユニセフ活動」には次のような側面があります

- ✔ 同じ年頃の世界の子どもたちの状況を知り、そこから自分たちが暮らす世界のように知るすることができます。
- ✔ 世界の厳しい状況下の子どもたちと比べて、よりチャンスが多い日本での自分たちの暮らしが、どのような人々の努力や仕組みに支えられているのか、気づくことができます。
- ✔ 世界の子どもたちを支援するためにユニセフがどのように活動しているか、また、子どもたちの未来を守る持続可能な世界を築くための取り組みを知ることは、社会や世界の困難な課題に立ち向かう方法を知ることにつながります。
- ✔ 自分たちにできることを考え、具体的な行動を企画し、実践することで、実際に変化を起こすために自ら動くことの大切さを学ぶことができます。
- ✔ 子どもたちによる行動が、学校内だけでなく、家族、周辺のコミュニティ、大人たちに影響を与えられることを知ります。



ユニセフ活動の流れ(案)

ねらい

毎年取り組んでいる「ユニセフ学校募金活動」の意義を再確認し、募金活動をグローバルな視野をはぐくむ深い学びにつなげる

世界の子どもの現状やユニセフの活動について知る・学ぶ

クラスで話し合い、さらに詳しく調べ、自分たちにできることを考える

募金活動や多くの人に伝える活動を展開する

活動のまとめや協力してくれた人たちへの報告をする

学校からの声

地域の20店舗と一緒に活動を行いました。各店舗のSDGsについての取り組みを生徒が取材してポスターを制作し、来店者にアピールするというのが趣旨でしたが、アクションとしてお店側のご協力もいただき、店頭での募金活動もさせていただきました。学校と地域そして国連機関のつながりを持てたことが大きな収穫でした。事前に神奈川県ユニセフ協会の講師派遣も利用しました。生徒たちの呼びかけに街の方が温かく耳を傾けてくださり、多くの募金をいただくことができました。生徒たちからは「ユニセフについて聞かれたときにきちんと答えられなかったこともいっぱいあったので、もっときちんと調べておけばよかった」「SDGsについて知らない人もいたので、もっと広めたい」など今後への意欲が感じられました。

横浜女学院中学高等学校(神奈川県)

幼稚園からの声

昨年は、幼稚園全体で水の大切さについて考える活動を行いました。夏にユニセフの動画と絵本を通して、世界にはきれいな水を使えない人や遠くまで水を汲みに行っている人がいることを知りました。それぞれの学年ごとに、一日に捨てている水がどのくらい調べたり、雨水を貯めて畑の水やりをしたり、水の大切さを自分で感じられるように活動し、保護者にも積極的に発信しました。活動を進める中で、ひとりひとりが水を大切にしようとする意識が高まりました。年長児から「自分たちも何かできることをしたい」という声があがり、11月、クリスマスに向けて、募金活動をするようになりました。半年間、水について考えて過ごしてきたので子どもたちの意識も高く、各家庭から思いの詰まった募金が届きました。

中野マリア幼稚園(長野県)

ユニセフ募金のはじまり

第二次世界大戦後、日本でも多くの子どもたちが厳しい暮らしを送っていました。1946年に国際連合の初の会議で創設されたユニセフは、1949年からの15年間、日本の子どもたちにも粉ミルクや衣類の原料となる原綿、医薬品など、当時の金額で65億円もの支援を送ってくれました。その支援へのお礼の手紙に、子どもたちが添えた大切な10円玉、これが日本におけるユニセフ募金の始まりです。子どもたちのあたたかな思いから始まったユニセフ学校募金は、今年で67年目を迎え、今も日本の子どもたちと世界の子どもたちを繋ぎ続けています。

